

## 「教祖伝の時代と大和の綿作」『天理教校論叢』第46号（令和3、2021年）註抜粋

\* 上記論文の提出原稿の抜粋です。本来は縦書きの原稿を、横書きに書式変換しています。

\* 『天理教校論叢』は、天理大学附属天理図書館にて閲覧が可能です。

**1**、日本における綿の栽培と普及の歴史、社会に及ぼした影響等についてはこれまでに多くの研究成果が発表されている。栽培の起源については文献によって多少異なる見解がみられ、本稿ではおもに永原慶二『新・木綿以前の事』（中公新書、一九九〇年）、同『苧麻・絹・木綿の社会史』（吉川弘文館、二〇〇四年）、柳田國男『木綿以前の事』（岩波文庫、一九七九年）に拠った。

**2**、『日本永代蔵』第五巻の第三「大豆一粒の光り堂」の記述に関して、『天理市史 史料集』（一九五八年）の小字名一覧には、佐保庄に「朝日」、「川畑」の小字が見える（五七八頁）。ただし、唐弓そのものは外国から伝来した物であることは間違いなく、この物語は創作である。

また、日本に初めて綿が伝来したのは八世紀末とされており、『類聚国史』巻一九九「崑崙」の項に、延暦一八年（七九九）に小船が参河国（三河国）に漂着して綿種を伝え、その翌年に朝廷は綿の種子を紀伊などの国々に配り、試植させたことが記されている。しかし、このときに各地に植えられた綿の種子は定着することなく途絶えたとされている。その後、戦国時代以降に全国に広まった綿栽培の起源と展開については諸説があり、はっきりしていない。この点について註1『新・木綿以前の事』には、「おそらく日本の国内における木綿栽培は、九州からはじまったであろう。しかしそれはかつて稲作が北九州から逐次東方に広まっていったのと同じような足どりをとったわけではあるまい。そうではなく、ほとんど同時的に、各地に併行して種子が伝わり、そこそこで綿作が行われるようになったのではないか。その際、北陸・東北方面が立ちおくれたことは事実だが、全体として国内木綿の栽培の開始と広まりを、江戸時代前期中心に見る通説的理解は訂正される必要がある。実際はそれよりも早く、十六世紀中における展開の度合いを、これまでよりは大きく評価すべきであると考えられるのである。」（一〇四頁）と記されている。

『日本永代蔵』に記されている唐弓の話や、『綿圃要務』に記されている綿栽培の大和起源説は、大和が早い段階から綿作がさかんに行われていた土地として知られていたことを物語る一つの資料と言える。

**3**、近世初期の大和の綿作については、奥田修三「近世大和の綿作について」（『ヒストリア』第一一〇号、大阪歴史学会、一九五五年）、朝倉弘「近世初期の大和の綿作について」（『国史論集』第二巻、京都大学読史会、一九五九年）参照。

江戸時代をとおしての大和における綿作の推移や綿の流通については、谷山正道「近世大和における綿作・綿加工業の展開」（『広島大学文学部紀要』第四三巻、一九八三年）、森本育寛「織豊期における大和の綿作と繰綿の流通」（『封建社会と近代—津田秀夫先生古稀記念』、同朋舎出版、一九八九年）、谷山正道「元禄・享保期大和の繰綿・木綿の流通構造」（『天理大学学報』第一六九輯、一九九二年）、谷山正道「安永期大和の綿国訴をめぐって」（『奈良学研究』第一五号、帝塚山大学奈良学総合文化研究所、二〇一三年）、谷山正道「幕末大和国における特産物の調査について」（『奈良学研究』第一七号、同、

二〇一五年) 参照。

なお、近世綿作の研究については、岩崎公弥「近世綿作研究の動向と今後の課題」(『愛知教育大学研究報告』第三号、一九八四年)が参考になる。

**4、**田畑輪換については、浮田典良「江戸時代の和一大一村落における耕地と綿作」(『地理学評論』第三〇巻一〇号、日本地理学会、一九五七年)、徳永光俊「近世大和の田畑輪換」(『日本史研究』第二〇三号、日本史研究会、一九七九年)、宮本誠『奈良盆地の水土史』(農山漁村文化協会、一九九四年)参照。なお、近世後期の和一大における綿作が決して水不足解消のためのみに行われたわけではないという指摘もある。岡村光展「近世後期の和一大綿作に関する一考察」(『地理学評論』第四八巻五号、日本地理学会、一九七五年)。

**5、**前掲『綿圃要務』には「大和国の綿、他国にてハ多く衾(ふとんなり)・衣類などの中入に用ひ、糸口にする事少く、糸口ハ多く河内綿・摂津綿を用ふ。是ハ其土地による事と見えたり。尤大和国にてハ専ら糸にひき、木綿を織なり。されどもいかなる事にか、河内・摂津ほどにはつよからず」(三九五頁)、「大和国の綿ハ糸口にハ悪しきとて、中入口にする也。いかにといふに綿堅く、毛太く」(四〇五頁)と記されている。

なお、『日本農書全集』第一五巻に収められている岡光夫「『綿圃要務』解題」は、近世の綿作を理解する上でも参考になる。

**6、**大和緋は宝暦年間(一七五一～一七六三)に御所の浅田松堂によって創始されたと伝えられている。当時はまだ大和の綿作の最盛期にあったが、実綿や繰綿、あるいは白木綿の状態を取り引きされることが多かった。そこで、付加価値をつけていづれ地域の産業としたいということから考案されたという。その後、図案や織機、技法の研究開発が進められ、大和木綿、大和緋は大和を代表する産業へと成長していった。『御所市史』(一九六五年、一九三頁)、大和木綿同業組合『大和木綿沿革史』(刊行年記載なし、六頁)参照。

なお、大和木綿、大和緋については天理大学附属天理参考館『大和もめん』(資料案内シリーズ、一九八一年)、奈良県立民俗博物館『大和がすり一郷土に育まれた染織』(特別展図録、一九九五年)、奈良県立民俗博物館『大和もめん』(特別展図録、二〇〇三年)参照。

**7、**明治初年における綿糸綿布の輸入量については、三瓶孝子『日本綿業発達史』(慶応書房、一九四一年)三六頁の第六表「明治初年綿関係輸入額表」参照。外国産綿種の栽培については、武部善人『綿と木綿の歴史』(御茶の水書房、一九八九年)に「執念をもって米国綿の試作につとめたが、結果は全国的に失敗におわったのである」(二〇八頁)とある。また前掲『日本綿業発達史』には「外来種は日本在来種と異なり、蒴が上向して開裂する特性ある為、日本の棉花開裂期の気候に適せず、ついに外棉種移植は失敗に帰した」(二九九頁)と記されている。

**8、**二千錐紡績所(十基紡)設立の経緯と成果の分析については、高村直助『日本紡績業史序説(上)』(塙書房、一九七一年)三九～五九頁参照。なお、開業に至らなかった佐賀物産会社を除く九箇所(所在地と設立年は、名和統一『日本紡績業と原棉問題研究』(大同書院、一九三七年)九五頁、飯島幡司『日本紡績史』(創元社、一九四九年)一九頁を参考にした。全国の各紡績所については、絹川太一『本邦綿糸紡績史』全七巻(社団法人日本綿業倶楽部、一九三七～一九四四年)が詳しい。

また、「豊井紡績所」については『奈良縣山邊郡誌(上)』(奈良縣山邊郡教育會、一九

一三年)に、「本縣ニ於テ未ダ紡績業ノアラザル時前川★徳獨カヲ以テ布留川ノ水カヲ利用シ今丹波市町大字瀧本ニ規模宏大ナル工場ヲ建テ夥多ノ職工ヲ役シ蒸汽機関ヲ備ヘ昼夜其業ヲ取りシモ時機早カリシ為メカ明治二十五六年頃遂ニ廢スルニ至ル然レドモ大和ニ於ケル紡績業ノ嚆矢タルヲ以テ特ニ記シタリ」(四七八頁)とある。豊井紡績所に関する先行研究については菊浦重雄「近代的紡績—豊井紡績所について」(『経済経営論集』第三四号、東洋大学、一九六四年)が参考になる。『大和百年の歩み 政経編』(大和タイムス社、一九七〇年)二九一～二九五頁には、豊井紡績所の概略が記されている。

**9、**前掲註8『日本紡績業と原棉問題研究』に「明治一一—四四年日本内地棉花栽培面積及生産量推移表」(一八一頁)、「明治二〇年・二四年全国各府県棉花作付段別及び実綿収獲量比較表」(一八二頁)が掲載されている。同表によれば明治二四年における奈良県の実綿生産量は全国六位に上昇している。

**10、**天理市域の綿の生産量については、『改訂天理市史』上巻(一九七六年)三九一～三九三頁、三九九頁参照。明治一四年頃の二階堂、朝和、丹波市、櫛本各地区における生産量が記されている。

**11、**明治政府が推し進めた国産綿を主原料とする綿糸紡績業は、その後に行き詰まる。需要の増大に国産綿の供給が追いつかず、しかも国産綿による手紡ぎ糸や紡績糸が、外国産綿による紡績糸(輸入綿糸を含む)に対して高価であったためである。輸入綿糸、外国産綿を原料とする紡績糸の方が圧倒的に安価で品質は安定していた。また、国産綿は質的に手紡ぎには適しても紡績用原綿には不向きであるとされ、紡績機のトラブルに適切に対処できる熟練技術者も育っていなかった。国産綿を主原料とする紡績業育成という政策は当初より種々の課題を抱え、「二千錐紡績の多くが失敗に終わった」(註8『日本紡績業史序説(上)』四五頁)のである。

「内地棉の供給不足、高価、紡績用原棉としての不適に対し、政府は棉種改良、棉作増進奨励の方策をとつたが、何れも成功しなかつた」(註8『日本紡績業と原棉問題研究』一一七頁)。こうして政府はついに、日本の綿作農家を守り国産綿の栽培を奨励するというこれまでの政策を転換せざるを得なくなる。明治二九年(一八九六)に輸入綿花に対する関税が撤廃されると、国産綿の生産は激減の一途をたどることになった(名和統一『日本紡績業の史的分析』潮流社、一九四九年、一二八～二一四頁)。明治三〇年には全国で四五六五万一五八一斤となり、同四四年には四五六万九〇八八斤にまで壊滅的に落ち込んだ(前同書、一八二頁)。東亜経済調査局編『本邦に於ける棉花の需給』(一九三二年)一四頁、二六頁参照。

なお、豊井紡績所は布留川の豊富な水量を動力にすることを前提に設計されたが、水量が予想以上に不安定であった。そのため、早々に蒸気機関に頼らざるを得なくなった。

石炭は木津川で運びそれから車で運んだといふから相当高い運賃に相違ない。積出地は大阪であつたらしい。善悪雑多の炭質があり場合に依つては磐城炭の如き泥土に塗れた赤色のものもあつた。水車と蒸気とのシャフトはカツプリングで連結する様にしてあり、水量の多寡により附けたり外したりした。夏期水量減少の際はロープを外して蒸気の方からのみ廻はした。(註8『本邦綿絲紡績史』第二巻、三五七頁)

このように、大阪で積み込まれた石炭を木津川経由で運び、そこから陸路を車で運搬することになった。これには多額の資金が必要となり、豊井紡績所はその後大和紡績会社、

前川紡績所と名称を変更しつつ、大きな成果を上げることができないまま、種々の事情により明治三二年に廃業した。その跡地が現在の豊井浄水場である。

国産綿を主原料とする紡績業の育成を掲げた政府の施策は失敗するが、同時期に渋沢栄一が創立・育成に尽力した大阪紡績会社（現・東洋紡）は当初から輸入綿花を原料に、蒸気機関による大規模経営を行い成功を収めた。「一八八三（明治一六）年に操業を開始した大阪紡績会社は、政府の直接的保護を受けることなく、当初から一万錐規模で蒸気機関を原動力として出発し、昼夜業を行なって資本制企業として最初の成功を収めた。」（前掲『日本紡績業史序説(上)』六二頁）、「注意すべきことは、同社創設の時期は、二千錐紡績創設のあとではなく、ほぼ同じ頃だったことである」（同、六三頁）と記されている。

こうして日本の近代綿糸紡績業は、このあと民間資本によって大きな発展を遂げていくことになる。

近代綿業史の研究動向については高村直助「綿業史研究の成果と課題」『技術と文明』第一二巻一号（日本産業技術史学会、二〇〇〇年）が参考になる。原綿に焦点を当てた研究としては川勝平太「十九世紀末葉の木綿市場—原綿を中心に—」『横浜開港資料館紀要』第二号（横浜開港資料館、一九八四年）、同「アジア木綿市場の構造と展開」『社会経済史学』第五一卷一号（社会経済史学会、一九八五年）が詳しい。

（中略）

**19.** 『改訂天理市史』下巻（一九七六年）には以下のように記されている。「機織（はたおり）は暮しを支えるたいせつな女の仕事の一つであった。家族の衣類—仕事着・アイ着・よそ行き着物などは、女が暇をみつけては機で織り、着物に仕立てて用を足してきたのである。もちろん、布団をはじめ生活に必要な布類もほとんど女が家で織った。奈良盆地は、すでに近世において綿作の盛んな地域であり、正月のナラシモチは綿の豊作を願って作るという習俗であった。（中略）綿を作り、糸つむぎから機織まで家でしたのは明治も前半期までぐらいで、その後は、郡山の町（大和郡山市）などで紡績の糸を求め、正月のハツゾメにコウヤ（紺屋）に出し、正月のヤブイリから機を織りはじめ、五月秋が始まると止めるが、その後も、暇ができると機にすわって家の者の五月モン・キハダなどを織った。」（二九九～三〇〇頁）

**20.** 耕作面積の約三割が綿作に当てられていたことを示す史料として、文政七年（一八二四）の「大和国山辺郡指柳村差出明細帳控」に以下のような記述がある。「当村用水不足之所故、木綿作年々三步通余茂仕候」『改訂天理市史』（一九七七年）史料編第三巻、三七三頁。

**21.** 筆者は平成二〇年（二〇〇八）より天理市内で綿の栽培をはじめ、昨年（二〇二〇）は約一反の畑で実綿約二二kgを収穫した。その綿を用いて糸を紡ぎ、草木染め、機織り、拵織りにも取り組んでいる。綿の栽培方法については、日本綿業振興会監修『はじめての綿づくり』（木魂社、一九八六年）、『地域資源を活かす生活工芸双書 綿』（農山漁村文化協会、二〇一九年）が参考になる。綿の品種や品質に関しては日比暉『なぜ木綿』（日本綿業振興会、一九九四年）が、手紡ぎ手織りについては佐貫尹・佐貫美奈子『木綿伝承—手紡ぎ手織り入門』（染織と生活社、一九九七年）、佐貫尹『続・木綿伝承—先人に学ぶ手わざと心』（染織と生活社、二〇〇九年）、佐貫尹・佐貫美奈子『高機物語—日本の手織り高機』（芸艸堂、二〇〇二年）が参考になる。

**22.** 綿の栽培によってもたらされる収益は、天候に大きく左右された。特に収穫期に雨が続くと良質の綿の収穫は期待できない。高騰する生産費や雇用人への労賃は綿作農家に重くのしかかり、綿価の下落や不作によって没落し、小作に追い込まれた農家は少なくなかった。『日本農書全集』第二八巻（農山漁村文化協会、一九八二年）に収められている「山本家百姓一切有近道」は、大和国山辺郡乙木村（現在の天理市乙木町）の大百姓山本喜三郎が、文政六年（一八二三）に子孫のために書き記した農業経営の手引き書である。そこには日々の心得や使用人に対する心構え、綿をはじめ各種作物の栽培方法などが事細かに記されており、生き残りをかけた農家の切実な思いがひしひしと伝わってくる。同書所収の谷山正道、徳永光俊両氏による文献解題は、当時の状況を知る上で参考になる。

綿作と寄生地主制形成との関わりについては高尾一彦「大阪周辺における綿作の発展と地主制の形成」（『明治維新と地主制』岩波書店、一九五六年）ほか、前掲註3「近世大和における綿作・綿加工業の展開」の註2（二〇頁）に参考文献が多数紹介されている。

**23.** 緋の技法は「括り」のほかに板締め、織締め、摺り込み、櫛押し、型紙捺染などがある。明治期以降、東の中野緋（群馬県）と並んで数少ない木綿白緋として知られた大和の白緋は、板締めによるものである。註6の奈良県立民俗博物館『大和がすり』参照。

**24.** 大和機については植村和代『織物—ものと人間の文化史⑧』（法政大学出版局、二〇一四年）、植村和代「大和の傾斜高機について（Ⅰ）」（『帝塚山短期大学紀要 人文社会科学編』第二六号、一九八九年）、植村和代「大和の傾斜高機について（Ⅱ）」（同第二八号、一九九一年）、横山浩子「当館所蔵の傾斜高機—いわゆる大和機について」（『奈良県立民俗博物館研究紀要』第一二号、一九九〇年）、横山浩子「大和の傾斜型高機」（同第一三三号、一九九三年）、横山浩子「大和機—大和の傾斜型高機」（『奈良県立民俗博物館だより』通巻一一一巻、二〇二〇年）参照。前掲『おやさま—陽気ぐらし浪漫』三九頁には大和機の写真が掲載されている。

なお、天理大学附属天理参考館の二階常設展示室には奈良県桜井市大豆越の織機（部材の一部に「山中」との墨書あり）として大和機が展示されている。

**25.** 用いる織機や織り柄によって作業効率は大きく異なるため単純に比較はできない。註19『改訂天理市史』下巻には「機織の一人前の一日の仕事の量は四反であったが、これだけ織るには夜明けと共に機にすわり、糸のめが見えなくなる日の暮れまで織った。」

（三三九頁）とある。また、前掲『教祖の御姿を偲ぶ』には以下のように記されている。

「（飯降）よしゑさんは一日中機を織っておられました。白の八反織で、家の中から出て来られたよしゑさんの両肩は、綿屑で真白でした。八反織とは織糸八反分の続いたものであります。明治十年代で、八反織って十八銭から二十銭位のものでした。当時、とびきり上手な人で一日四反を織りこなす人もあったそうです。大抵の人は一日二反というところがいいところでした。ついでですが、お米はその時分で一石五円から六円といった相場でした。」（九六頁）。ここでの四反は白木綿と考えられる。飯降よしゑ姉は明治一五年からおやしきに移り住んでいた。なお、八反織の織糸が天理大学附属天理参考館二階常設展示室に展示されている。当時の製織工程を知る上で貴重な資料である。

**26.** 「賃機織り（ちんばたおり）」について、註19『改訂天理市史』下巻には「三、賃機織り」において、「テカセギ（賃稼ぎ）の木綿織りは娘達の大きい仕事であった。気のあった娘達はどこかの家に集まって機織をすることがよくあり、一緒に織ると仕事にはりを

つけようと機織歌をうたう者もあり、そうすることで、いきはりができて仕事はずんだという。」(三三九頁)と記されている。

機織歌については、同書三四〇頁に「二十三夜はねぶとて寝とて／殿と二十六夜はねぶとない」「今井織り子さん何というて泣きやる／かすり合はんというて泣きやる」とあり、前掲『教祖の御姿を偲ぶ』には「機織りの唄」として、「うたは理でつむ布はおさでつむ／しんころくろ(綿と実をよりわけの小機械)はせんでつむ」(九八頁)が挙げられている。

**27.**糸紡ぎや機織りが一家の生活を支える仕事ともなったことは、木綿織物がさかんな地では多くみられたようである。福井貞子『木綿口伝』(法政大学出版局、一九八五年)に「紡糸も人の手の器用さに頼るため、滑らかに紡ぐには少女時代から熟練しなければ商品にならなかった。それを恐れた親たちは、十歳に満たぬ小娘を糸挽宿に通わせ、無理に強制指導をした。」(三三頁)と記されている。これは山陰地方の話であるが、これとよく似た状況は全国でみられたと考えられる。